

5年以内の死亡を最も強力に予測するのは問診で得た情報

中高年の死亡に関する予測因子について、これまで系統的に比較されてはいない。そこで本研究では、英国のバイオバンクのデータを用いて全死因および死因別の5年死亡の予測因子について検討し、さらに患者の自己申告による情報のみを用いて5年死亡の予測スコアを開発し、その妥当性を検証した。

英国バイオバンクへの登録は2007年4月～2010年7月の間にイングランド、ウェールズ、スコットランドの21施設で行われ、およそ50万人のデータを収集した。人口動態、健康、生活様式に関する655項目のデータと全死因死亡および6つの死因別死亡との関連を男女別に統計学的に分析した。37～73歳の498,103例が解析の対象となり（54%が女性）、4.9年（中央値）の追跡期間中に8,532例（39%が女性）が死亡した。男性では、自己申告による健康状態が最も強力な全死因死亡の予測因子であった（C-index：0.74）。女性では、がんの診断歴が最も強力な全死因死亡の予測因子であった（同：0.73）。重篤な疾患を有する者を除外した場合（355,043例）、最も強力な全死因死亡の予測因子は喫煙習慣であった。予測スコアは、男性で13項目、女性で11項目の自己申告による予測因子をもとに算出し、男女ともに良好な識別力を示した（C-index：男性0.80、女性0.79）。

今回の結果から、身体的な検査を行わなくても、問診で得られる情報で中高年の5年全死因死亡を最も強力に予測できる可能性が示唆された。また、予測スコアを用いることで患者は自分の健康状態への認識が高まり、医療者は死亡リスクの高い患者を同定し介入の対象を絞り込むのに役立つと考えられる。

出典：Lancet. Published online Jun 3, 2015; doi: 10.1016/S0140-6736(15)60175-1